

753

警察叢書第二十三輯

國家主義運動の意義

奈良縣警察部

卷之五

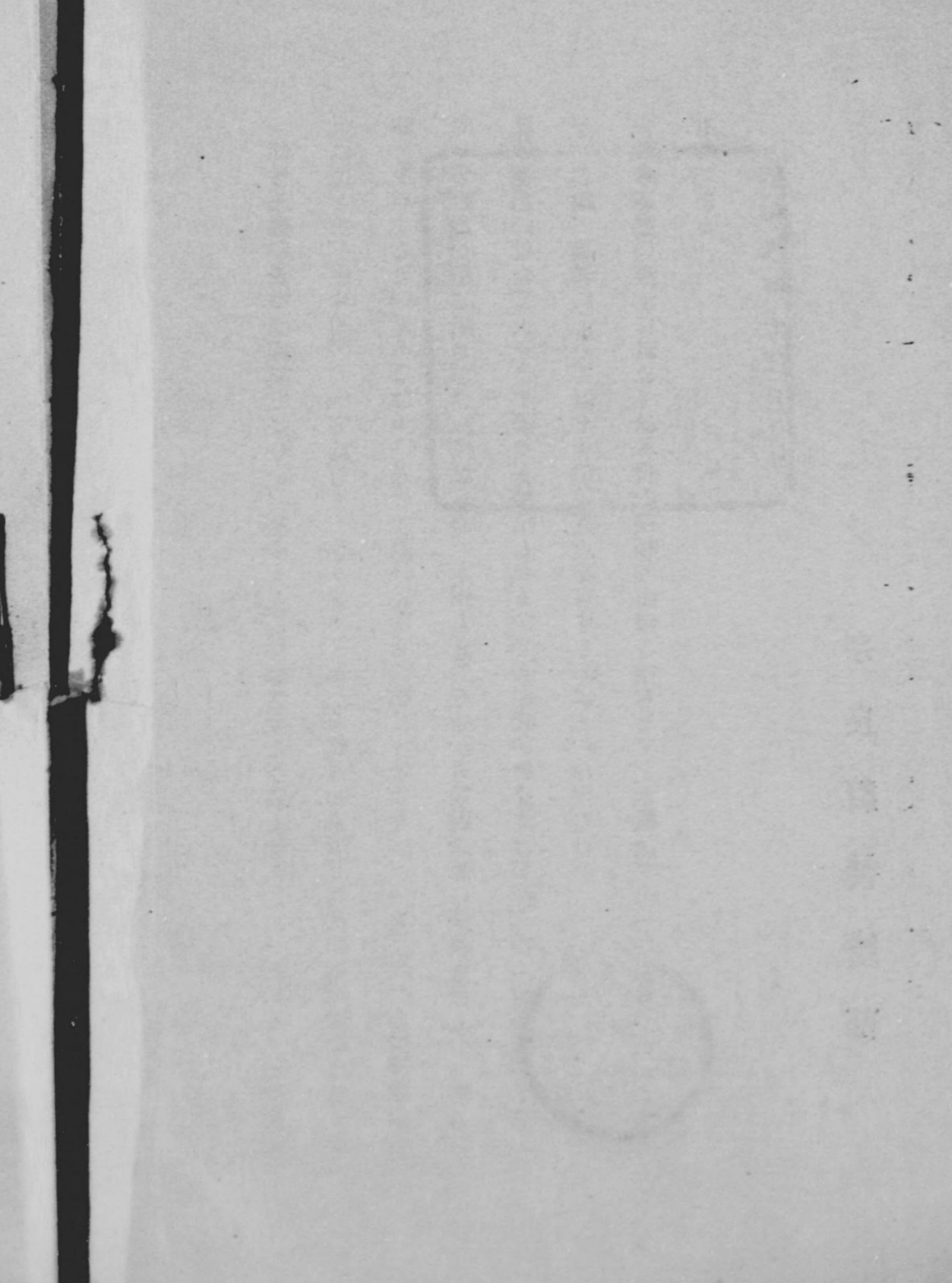
卷之五

社會運動の査察は理論ではない、たゆまざる外部活動こそ最も望ましい。だが凡ての社會運動は個々の、断片的のものではなく、各々據つて來たる社會的原因に特殊の指導理論に基く連關性を有するものである以上、其の運動の動向を觀察せんを欲せば、須らく源たる指導理論の何ものなるかを認識せなければならぬ。本輯も此の意味から最近急激に擡頭進展しつつある右翼の運動に就いて夫々の主張点を抽出したもので各主義の概念丈は捕捉し得られるものと思ふが、勿論、論者によりては多少の差異点を有するのは止むを得ない。

尙社會運動の潮流に就いては各自の積極的研鑽を望む所で、本輯は其の一助たらしめんとするものである。

昭和八年十二月

奈良縣警察部



目次

一、まへがき	一
二、日本精神	三
三、國家主義	一五
四、國家社會主義	一七
五、國民社會主義	二〇
六、日本主義	二三
七、皇道主義	二五
八、スメラギズム	二九
九、國粹主義	二九
一〇、農本(自治)主義	三〇
一一、ファッシズム	三一

一二、社會ファッシズム……………	三七
一三、大亞細亞主義……………	三八
一四、主要右翼團體の主義綱領……………	三九

國家主義運動の意義

一、まへがき

近時急激に擡頭進展しつゝある國家主義—ファッショ—の運動は、マルキシズムから發展した所のプロレタリア運動に眞向から敵對し、猛烈なる行動によつて國家國民の傳統維持に直進しようとするものであり、更に政黨財閥等所謂特權階級の腐敗墮落を匡正して、眞に天皇親政の下に搾取なき一君萬民の理想國家を建設せんことを主張するものであるから、勿論其の主張乃至團體の綱領そのものに對しては、濫りに制肘すべきものではないが、中には其の主張の貫徹に性急なる餘り、動々ともするに直接行動に出で、遂には國法に觸るゝに至るものゝあることは、最近の血盟團、五、一五、神兵隊等の各事件に徴しても極めて明らかである。

此の傾向は現在我國の客觀的情勢より見て、尙相當の進展性を持つものに見られ、従つて治安維持を職分とする警察官の對象としては、從來の共產主義に對するものゝ相並んで重要性を持つ。

そして之等の運動者の多くが抱き易い、警察官の立場に對する誤解、其の運動の變轉極まりない中に伍して、真相を把握し適切に警察權を執行せんことは、極めて困難事である。然し警察官は飽迄其の正しき職分——天職——を盡す爲には、外議に動搖せず敢然として進まねばならぬ。

斯くして確固たる信念を誤り無き認識の下に發動する警察活動は、即ち眞に國家を衛るの途であるから、警察官自身絶えず國史に稽へ、日本精神をはつきり認識把握し、更に社會運動の情勢に通曉するこゝを要する。

斯の種運動の趨勢を觀察するためには、その根源たる指導理論の如何なるものかに就き認識を明らかにし、根本的に排除すべき思想、思想そのものは穩健にして我國體の精神に背反せず寧ろ合法的に發展せしむるこゝが國家の利益なるものの區別を明瞭にしておかねばならぬ。然して現在國民の指導精神たるべき日本精神の概核並に國家主義其の他右翼的各主義の主張する所を抽出せば次の通りである。

二、日本精神

日本精神とは我國の建國以來、日本歴史を通じて我國民が一つの國家的乃至民族的行動規範として信奉し孜孜として之を實踐し來つた傳統的精神である。即ち之れを定義付ければ、

「日本國體たる 天皇中心、一家的體制の下に建國の理想即ち日本民族の理想を實現せんとする精神」を規定することが出来る。

即ち日本精神は其の内容として、

(イ)日本國體(建國の組織原理)たる天皇中心一家的體制の維持發揚

(ロ)日本建國の理想(建國の目的原理)の實現

の二要素を含む。従つて日本精神は國家組織上の規範たると共に國家目的上の規範である。そして之れは便宜的に抽象的に机上で案出された架空の規範ではなく、建國以來三千年日本民族がその國家生活に於ける民族的行動規範として信奉し、君民一致其の實現に努力し來つた云

ふ嚴然たる歴史的背景を具有するものである。(警察研究第九號、管太郎)

即ち日本建國の理想を實現せんとする　天皇の當爲的統治意思と、同じく建國の理想を實現せんとする全國民の當爲的輔翼意思との、合致融合により存在する皇室を中心とし、之れを宗家として、義は君臣なれども情は父子たるの大家族精神である。そして日本建國の理想とは如何なるものであるか、要約して云へば、

「日本國體の下に日本民族が合體として向上發展、和親團結し精神的及物質的に充足せる理想國家を實現すると共に他方日本文化と日本民族性を以て他民族を同化融合し、　天皇中心的體制の下に之れを一家族化せしめ以て各民族平等に其の生を樂しむ理想的世界國家を實現するところ」を内容とする。

西洋文明が日本に輸入されて、その特徴である科學や哲學の盛んになつたことは勿論であつたが、それと同時にその弊害である利己主義、我慾主義が國家の基礎を危くするであらうと云ふことは既に屢々心あるものゝ憂ふるところであつた。既に明治大帝陛下は明治二十一年の頃これについて御憂慮あらせられ、或日侍講元田永孚氏を召させられて、その点を御述懐あそばさ

れたこのことである。この陛下の御憂慮は四十五ヶ年を経過した今日に於て、不幸にも遂に適中したのである。總ての公私の専門學校、殊に帝國大學はマルクス主義宣傳の學府となつた觀さへあること云はれ、單に大學だけではなく、共產主義の病毒は小學校教員の中にまで傳播しつつある。この歐洲文明の弱点たる利己主義の病は如何にして治療すべきか云ふことが、現在日本の中心課題であるが、此の利己主義が政黨の中に瀰漫して遂に選舉の腐敗となり、農村の窮乏となり、これに憤慨したる軍人の驟起となつて、五、一五事件なるものが現れた。五、一五事件は政黨の腐敗、資本家の利己主義に對して起つたものではあるが、同時にそれは腐敗せる選舉人に對する鬱憤であるから、これを西洋文明の缺點である利己主義に對する彈壓云ふことが出来る。

滿洲事件と五、一五事件を中心として、日本精神は澎湃として勃興したが、この日本精神の依つて來たるところは抑々何であるか云ふこと、それが我等の研究の對象である。日本精神なるものは、日本人すべてがこれを意識してゐて、唯これを表現し得ないものである。それを表現し得ないこと云ふのは、それが單なる感情に止まつて、いまだ理智の程度までに進展してゐな

いからである。併し乍ら若し日本國民の勃興が、この日本精神によつて行はれたと云ふならばそれは世界の一大事實であつて、これを理智の形に於て表現するまでに發達せしむることは、我等の義務でなければならぬ。

總ての社會的な事實は、一朝一夕に出來上るものではない。それはその國の歴史に根據を置くものであらねばならぬ。我國の二千五百年の歴史及び傳統が、國民生活のうちに醗酵し、發達し、結晶して成立したものである。總ての社會精神は社會生活の所産である。社會學者は説く。従つて誰が作つたものと言ふのでもなく、知らず識らずして社會に結成したのである。それが日本精神であつて、従つて我等はこれを國民の歴史のうちにその本質を討ねるより外に方法は無いのである。

若し我等が日本の歴史を遡つて行くなれば、そこに我等の逢着するところのものは、宗教であり、神和である。佛のデユルカームは、すべて社會現象は宗教から始まるを説いてゐるが、日本の社會も亦その原則の外に立つことは出來ない。我等の歴史の出發点は即ち神代の傳説である。そしてその傳説の中心をなすものは天孫降臨の事實である。日本書記には、これを「葦原

ノ千五百秋ノ瑞穂ノ國ハ是レ吾ガ子孫ノ王タルベキ地ナリ、宜シク爾皇孫就テ治ラセ、行クマセ、寶祚ノ隆エマサンコト天壤ト窮リ無カルベシ」ミ言ふ天照皇大神の勅語に言ひ表はされ、後世北畠親房は、その神皇正統記の冒頭において「大日本は神國なり、天祖始めて基をひらき、日神長く統を傳へたまふ、我國のみ此事あり、異朝にはその類無し、この故に神國ミ云ふなり」ミ云つて、我國家の基礎が宗教的信仰から始まつてゐることを説いてゐる。この日本は神の始め給ふた國であり、しかも皇室はその神の延長であるといふ信念こそ、我國の歴史に一貫したる根本精神であつて、そこに君ミ民ミの結合が、宗教的の基礎を持つてゐるこそが明白ミなる。即ち君主は神であつて、人民はこれを宗教的崇拜の對象ミなし、神を拜するミ同様の敬虔の情を以て君主に對するミ云ふことになるのである。そして御歴代の天皇は皆民を以て「オホミタカラ」ミ詔せられて自ら民の父母ミ稱せられてゐる。（『日本精神講座』五來欣造）この信念こそ日本精神であらねばならぬ。

要するに我國は神國である、神ながらの國である。

明治天皇の 御製に「我國は神のするなり神祭る、昔の手ふり忘るなよゆめ」ミ仰せられたの

もこの御精神を歌はれたのである。

神代の神々は皇室の御祖先である。

神武天皇東征を終へられ、橿原の宮に即位されて後、紀

元四年二月二十三日 詔せ給ふた「天祖の靈、天より降臨して輔け給ふた爲、全ての賊を平けるこそが出来、最早従はぬ者にて無い、それで鳥見山中に靈時を定めて、天祖を祭る」云ふ郊祀詔こそ最も皇室に神代との關係を表現せられたもので、肇國宏遠の言葉も此處で判然となつて居るのである。其の後崇神天皇、文武天皇の詔にも夫々建國の御精神を説かせられ、又聖德太子の十七條憲法の精神も實に我建國の理想たる國を肇むること宏遠に、徳を樹つること深厚なる点を遺憾なく表現されてゐる。茲に十七條憲法の全文を掲げる。

聖德太子憲法十七條

推古天皇十二年夏四月

一二曰ク和ヲ以テ貴シト爲シ、忤^{サカ}フコト無キヲ宗^{ムネ}ト爲ス

人皆黨^{サトレ}アリ亦達^{サトレ}ル者少シ。是ヲ以テ或ヒハ君父ニ順ナラズ或ハ隣里ニ違フ、然レ

ドモ上和ラギ下睦^{ムツ}ビ諸^{カナヒ}ヌレバ事ヲ論^{アゲツ}ラムトキニハ事理自ラ通ジテ何事カ成ラザラム。

二二曰ク 篤ク三寶ヲ敬ヘ

三寶トハ佛、法、僧ナリ即チ四生ノ終歸、萬國ノ極宗ナリ。何レノ世何レノ人カ是ノ法ヲ貴バザルモノアラム。夫レ人尤ダ惡キモノ鮮^{マシ}ナリ、能ク教フレバ從ハム。三寶ニ歸^ヨラザレバ何^{イカ}デカ枉^{マカ}ヲ直サム。

三二曰ク 詔リテ承テハ必ズ謹メ

君ハ天ナリ臣ハ地ナリ、天ハ覆ヒ地ハ載セテ四時^{メグ}順^{ノタマ}リ行キ方氣通フコトヲ得ム。地若シ天ヲ覆ハムトセバ壞ルルノミ。是ヲ以テ君言^{ノタマ}ヘバ臣承^{ノタマ}リ上ノ行ヒハ下靡ク故ニ詔リテ承ケテハ必ズ慎メ。謹マサレバ敗レム。

四二曰ク 群卿百僚禮ヲ本トセヨ

其レ民ヲ治ムルノ本ハ禮ニ在リ、上禮ナキトキハ下齊ハズ、下禮ナキトキハ必ズ罪有ラン、是ヲ以テ君臣禮有ルトキハ位ヒ亂レズ、百姓禮有ルトキハ國家自ラ治マル。

五ニ曰ク アデノヨク 餐ヲ絶チ タカラノヨク 欲ヲ捨テテ訴訟ヲ明ラメ辨ゼヨ

ソレ百姓ノ訴ハ一日ニ千事アリ、一日スラ尙爾リ況ヤ歳ヲ累ヌルヲヤ。此ノ頃訟ヲ治ムル者ハ利ヲ得ルコトヲ常ト爲シ、マヒナ 賄ヒヲ見テハ タノミゴト 讞ヲ聽ク、スナハ 便チ財アルモノノ訟ハ石ヲ水ニ投グルガ如ク、乏シキ者ノ訴ハ水ヲ石ニ投グルニ似タリ、是ヲ以テ貧民ハ則チ由ル所ヲ知ラズ。臣ノ道モココニ闕ケヌ。

六ニ曰ク 懲惡勸善ハ古ヘノ良キ典ナリ、

是ヲ以テ人ノ善ヲ匿クス無カレ。惡ヲ見テハ必ズ匡

スベシ

其レ諂ヒ詐ク者ハ國家ヲ覆ヘスノ利器ニシテ、人民ヲ絶ツノ鋒劍ト爲ル。又佞媚者ハ上ニ對ヒテハ好ミテ下ノ過チヲ説キ、下ニ逢フテハ上ノ失チヲ誹謗ス、此クノ如キ人ハ君ニ忠ナク民ニ仁ナク大亂ノ本ナリ。

七二曰ク 人各々任掌有リテ濫レザルベシ

其ノ賢哲官ニ任ズルトキハホムルコエ頌音起リ、カタマシキヒト奸者官ヲタモツトキハ禍亂繁シ。世ニ生レナガラ知ルコト少ナシ克ク念ヘバ聖トナル。事ニ大小ナク人ヲ得レバ必ズ治マル。時ニ急緩ナク賢ニ遇テ自ラ寛ヤカナリ、此ニ因リテ國家永ク久ク社稷危フカラズ。故ニ古シヘノ聖王ハ官ノ爲ニ人ヲ求メ、人ノ爲ニ官ヲ求メズ。

八二曰ク 群卿百僚早ク朝リ晏ク退デヨ

公事監イトマナク終日ヒネモスニモ盡シ難シ、是レヲ以テ遅ク朝マサルトキハ、急ニ逮バズ、早ク退マカルトキハ事盡サズ。

九ニ曰ク 信ハ是レ義ノ本ナリ事毎ニ信アリ

其レ善惡成敗ハ要ズ信ニアリ。カナラ君臣共ニ信アルトキハ何事カ成ラザラム。君臣信ナキトキハ萬事悉ク敗ル。

十二曰ク 忿コ、ロノイカリヲ絶ノノイカリチ瞋ノノイカリヲ棄テ人ノ違フコトヲ怒ラザレ

人皆心有リ心各執トリゴト有リ。彼ノ是ハ我ノ非、我ノ是ハ彼ノ非ナリ。我必ズシモ聖ニ非ラズ、彼必ズシモ愚ニ非ラズ、共ニ是レ凡夫ノミ、是非ノ理誰カ能ク定ム可キ、相共ニ賢愚ナルコト環ノ端無キガ如シ。是ヲ以テ彼ノ人ハ瞋イカルト雖モ還リテ我力失アヤマチヲ恐レヨ。我獨リ得タリト雖モ衆モロニ從ヒテ同ジク舉ヲコナフベシ。

十一ニ曰ク 功過ヲ明察シテ賞罰ハ必ス當テヨ

日者ハ賞ハ功ニ於テセズ、罰ハ罪ニ於テセズ、事ヲ執レル群卿宜シク賞罰ヲ明カニスベシ。

十二ニ曰ク 國司、國造ミコトモチハ百姓ヲ歛トリヲサムルコトナカレ。

國ニ二君ナク民ニ兩主ナシ、率土ノ兆民タカミハ王ヲ以テ主ト爲ス。任スル所ノ官司ツカサハ皆王ノ臣ナリ。何ゾ敢テ公ケニ與リテ百姓ニ賦歛セム。

十三ニ曰ク 諸モロノ官ニ任スル者ハ同ジク職掌ヲ知レ

或ハ病アリ、或ハ使シテ事ニ闕クル有リ、然レドモ知り得ルノ日ニハ和スルコトムカシ曾ヨリ識レルガ如クセヨ、與リ聞カズト云ヒテ公務ヲ妨グルコト勿レ。

十四ニ曰ク 群臣百僚嫉妬アルコトナカレ。

我レ既ニ人ヲ嫉メバ、人亦我ヲ嫉ム、嫉妬ノ患ウレヒソノ極ヲ知ラズ、故ニ智、己ヨリ勝ラバ悦バズ、才、己ヨリ優ラバ嫉妬ス。是ヲ以テ五百歳ノ後ニハ賢ニ遇ハムトモ千載ニシテモ一聖ヲ待チ難カラン。其レ賢聖ヲ得ザレバ何イカデ以カ國ヲ治メム。

十五ニ曰ク 私ヲ背ケテ公ニ向フハ臣ノ道ナリ。

凡^{タガ}夫人私アレバ恨ミアリ、憾アレバ同セズ、同セザレバ私ヲ以テ公ヲ妨ゲ憾ミ起
ルトキハ制ニ違^{タガ}ヒ法ヲ害ス、故ニ初ノ章ニ上下和諧ト云フハ是ノ情ナル歟。

十六ニ曰ク 民ヲ使フニ時ヲ以テスルハ古ヘノ良キ典ナリ。

故ニ冬ノ日ニ間有^{ヒマ}ラバ民ヲ使フ可シ、春ヨリ秋マデ農^{ナリハヒコカヒ}桑ノ節ハ民ヲ使フベカラ
ズ。

農サレバ何ヲカ食ハム 桑ザレバ何ヲカ服ム。

十七ニ曰ク 夫レ事ハ獨斷スベカラズ、必ズ衆ト共ニ論ズベシ
小事ノ輕キハ必ズシモ衆ト共ニスベカラズ、唯シ大事ヲ論ズルニ逮ビテハ失^{アヤマ}チ有
ランコトヲ疑フガ故ニ衆ト相辨ベシ。辭則チ理ヲ得ム。

(「日本神典及神ながら之道」松本貞二郎)

三、國家主義

近來愛國主義的社會運動が勃興したので、之等を一括して「國家主義運動」と呼ばれてゐるが、其の内容は極めて複雑である。之れを定義すれば

「國家主義とは國家は國民個人又は外國に優越して存在せる最高の協同社會であるから國民は自己の屬する國家のためには何人とも雖も其の利害を犠牲にすべきものである」とする主義である。

簡単に云へば「國家主義とは個人や世界の利害よりも國家の利害を重しとする主義である」随つて個人主義及國際主義と對立する。(緋田工著、特高必携)

即ち現實の世界は國家的對立であり、國家なくして國民はあり得ない。しかも國家の強盛は必ず國民の幸福を齎す、資源に富める國土、殖民地の多くを持つ國家は強盛である。又各國家は、如何に外交的親密を持つてゐても、一度利害の問題となれば自國の利益のためには他國の如何なる犠牲も省みざる現情にある。それは歴史的に不變の事實である。歐洲大戰の豫想外の慘禍が世界の人心をして戦争の回避、平和の確立を企願して國際聯盟をつくり、これを世界の

永久平和の殿堂たらしめやうとしたけれども、しかし各國民間の國家意識は、それによつていさ、かも減衰されず、利害問題に當面すれば忽ち對立感情を激發せしめつゝあり、且つ國際聯盟を自國の權益擁護にのみ利用せんとしつゝある現情にある。

かくの如き情勢下に於て國際協調を名として自國の強大を犠牲にせんとする様な事があらば、それは國家、國民をして自滅に導く結果となる。だから國民の幸福を圖らんすれば先づ國家の強大を策すべきである。國民の繁榮はたゞ國家の強盛の上にのみ約束せられる。國家の強盛が國民の繁榮を拓く唯一の原因であり手段である云ふのが國家主義の思想の根本であり、それだから國民は國家の強盛のために敢然として挺身奮起する絶對的義務があり、それが國民繁榮の道であるを主張する。(思想警察室通論)

そして此の國家主義による運動が我國に於て發展し實踐的に成長する上に於て著しく國粹主義乃至日本主義の色彩を深め一つの團體の綱領を考察する場合に於ても其の何れに屬するや判然しないものがある。此の原因は特に我國が皇統連綿世界無比の皇室を戴き晋天の下率土の濱王土にあらざるなき特殊國體であるため、各主義其のものには多少の主張の異なるものがあつ

ても實踐上歸一するの外無き爲であるを云へる。

四、國家社會主義

國家社會主義を云ふ言葉は元來獨逸のビスマルク等によつて唱へられた「ステートソシアリズム」の譯語で元來の意味は所謂「社會政策」のことであり、決して資本主義を否定するもので無く、之れが改良乃至補正を主張する思想であつたのであるが、我國に於いては大正八年頃故高島素之が自己の創案せる思想を「國家社會主義」を銘打つてから「ビスマルク」の唱へたものは全然相異なる内容を持つに至つた。

國家社會主義の經濟制度に對する主張はマルキシズムとは全然異なり、社會主義（集産主義）の夫れと等しく、主要生産、金融、交通等の諸機關及土地を公有又は國有化せんとするものである。財の分配方面に對しては、私人的處分を認め其の共有化を主張しない。

之れを定義付ければ「國家社會主義とは國家の力によつて一種の社會主義を實現せんとする主義である」と云ふてよく、其の内容を我國の社會に當て簾めて具體的に云へば「天皇中心の下に或る種の事業乃至或る限度以上の私有財産を國家の所有に移し、やがて此の世の中から搾取關係を無くしようとする思想である」と云へる。（緋田工著特高必携）

眞正の國家社會主義とは社會主義の正統に屬して、即ち民主々義的國家に立脚して、集産主義を實行する主義を謂ひ、修正派社會主義の主張と一致する。（「社會ト思想」高木斐川）

國家社會主義とは國家主義と社會主義との結合したもので概言するならば「國家の力によつて社會主義を實現しようとする主義」である。而して決してファッシズム其のものでは無いのであるが、ファッシズムに頗る近似し大體に於てファッシズム系の思想と目すべきものである。此の点では農本主義も同様である。（「特高警察全書」佐々木與四藏）

學者の意見

國家社會主義を一口に言へば「國家主義と名づくべき國民道德の原理によつて指導され、綜合辯證法と名づくべき社會哲學によつて基礎づけられるところの超階級的國家的社會主義の謂

である」云ふことが出来る。即ち國家が國家のために國家によりて行ふことの社會主義である。

國家は帝國と區別されなければならぬ。共同の祖先と共通の傳統及文化を有する一民族がそれ自身獨立の法的秩序を有するに至つたものが國家であり。一國家が他民族を支配して之に法的統制を加ふるに至つたものが帝國である。

國家社會主義は單に國家が國家の中に行ふことの社會主義を指すのではない。若しそれならば共產主義も亦國家社會主義に外ならないであらう。國家社會主義の國家社會主義たる所以のものは、云ひかへれば國家社會主義の本質的特徴をなすものは國家が國家のために國家理想追求の手段として行ふことの社會主義たるところにあるのである。これを國民の側から言へばあらゆる階級を超越して至上の位置にあるところの國家そのもの、久遠の理想に奉仕するがために、全國民の協同的本然社會の實現、即ち渾然たる無階級の國家を建設するがために社會主義を欲求するのである。（「國家社會主義原理」林癸未夫）

五、國民社會主義

此の言葉は近時獨逸に於てアドルフ・ヒットラーの率ゆる「ナチス」の有名になつた關係上人口に膾炙するに至つたが、此の主義は大體に於いて國家社會主義と大差ないものと見てよく、事實我國に於ては屢々同一意味に使用せられてゐる。

唯國民社會主義に於ては「祖國意識」が甚だしく強調せられ、祖國第一、自國第一の氣持が國家社會主義に於ける場合よりも強烈である。即ち自國乃至民族の優越性と獨自性を強調する。（緋田工著特高必携）

國民社會主義は國民主義と社會主義との結合體と見るべきである。強いて云へば國民社會主義の國家理論は民族的國家觀でつまり一般國民の幸福を主眼とし、民族の發展が同時に國家の發展であるこの見解を採るのであるが、國家主義と國民主義とが殆んど逕庭する處がないのと同様、國家社會主義と國民社會主義とは恰かも楯の兩面の如く實際問題として此の兩者を辨別することは頗る困難であり、又區別するも實益ないことである。現在我國には純然たる國民社

會主義の政黨、又は團體として擧ぐるまで色彩の判明してゐるものは存在しない、又かゝる傾向の團體はあつても自ら國家社會主義であるを稱してゐる實情である。（「特高警察全書」佐々木與四藏）

國民社會主義も資本主義も共產主義もに反對して社會主義國家の建設を目的とする点に於ては、まさしく國家社會主義も同一である。然し國民社會主義が共產主義に反對する理由はそれが無產階級獨裁制であるを云ふことに重点をおかないで、それが國際主義に立脚するを云ふことに重点をおくのである。

言ひかへれば共產主義の革命運動がプロレタリアの國際的團結、國際的統制によつて超國家的世界的運動として行はれることに反對するものである。（「國家社會主義原理」林癸未夫）此の点が國家社會主義の國家自體の目的、理想を實現する爲に共產主義を根本的に排撃するの區別し得るものと云へる。

六、日本主義

明治維新直後急激に流入せる自由民權思想のために甚だしく泰西文化を讚美せる所謂西洋崇拜時代たるの時潮を慨して陸實一派の創始した雑誌「日本人」及「日本新聞」に依る運動を以て日本主義運動の濫觴とする。従つて一見新しい意味を持つものではないかの様に見えるが、實は此の言葉の意義が近來急轉的に變化し今日社會運動用語としては「天皇制を絶對無上の至尊的指導精神として現在の資本主義を倒し統制經濟と勤勞者本位の政治を實現せんとする主義」を指すことになつた。そして斯る日本主義を古來の現状維持的日本主義と區別するため特に「革新的日本主義」或は「戰國的日本主義」と呼ぶ人もある。

此の主義は、國民と天皇との關係を父子の關係に於て見るものであるから、従つて國民の間に階級の存在することを許さず、或る階級が或る階級を支配し搾取することを許さない。國民が統率せられ、總攬せらるべき中心主體は唯 上御一人のみであるとする。従つて眞の日本主義は資本主義を否定することゝなるわけである。

由來日本民族の信仰に従へば、我が日本は國土、山川、草木、人獸、皆悉く、天皇の有たる

べきものであるとせられてゐるから、一私人が土地を領有し、或は生産機關及金融機關等を私有してゐるこゝ自體が我が國體に反する事柄であるとするのである。

故に眞の日本主義に依れば、我が國の凡ゆる財は皆 天皇有化―手取り早く云へば國有化せらるべきものとなる。唯彼等は或る程度の私有財産は之を各個人に所有せしむるこゝが、統治上乃至經濟上便益であると爲してをり、結局私有財産の思ひ切つた限定を主張するものである。

我が國に於て、現在此の派の代表的團體は「神武會」「大日本生産黨」「愛國勤勞黨」等である。(緋田工著。特高必携)

日本主義に對する一二の者の見解

「日本主義の意義に就ては人に依りて説く所を異にするものもあるが、天皇中心主義、日本至上主義を高唱する点は何れも共通せる所である。中には更に政黨政治を否認し獨裁政治の確立を主張するも共に國際協調さへも排撃し、經濟的には反資本主義的態度を採るかに見えるものもある。」(「特高警察全書」佐々木與四藏)

「日本主義は階級利益を本位とする部分主義に非ずして全體を生かし全體の利益と幸福を發展せしむる原動力である。」（「我等の進むべき途」赤松克麿）

「日本主義の眞髓中核は萬世一系の天皇を中心として日本民族が一心同體に家族的生活を爲し一切の自我を捨て、此の中心的對象の中に自己の一切を捧げるこゝによつて自己を最も完全に生かすの途とする處の信念と實踐のすべてを指すものである。」（「日本の社會主義の提唱」津久井龍雄）

「日本主義は根本に於て一つの人生觀であり世界觀であり絶對的な信仰に立つ一つの宗教である。寧ろ狂信とも云ふべき宗教的信念である。信仰の對象は云ふまでもなく天皇の「スメラミコト」である。日本主義とは一言にして云へば天皇教である。」（「日本主義の再吟味」中谷武世）

七、皇道主義

この主義は近來一部の人々によつて使用せられてゐるが大體に於て革新的日本主義と同一のものを見てよい。唯日本主義なる語が往々反動的に響くので之れを分別せしめんとして此の新名稱を採用せるものと云へる。(緋田工著特高必携)

所が茲で一應の説明を要するのは皇道主義と王道主義との區別である。最近滿洲を統治するについて頻りに王道政治を振廻すものがあり、兩者を混同してゐる様であるが觀念上はつきり區別すべきである。

王道は支那に發達したものであり、日本の皇道とはその根本精神を異にする。今この兩者の區別される点を略述する。

(一) 支那人の信念は哲學であり、日本人の信念は宗教であること云ふことが、先づ上げられるべき重要な區別である。支那人は希臘人と同じく哲學的國民である。兩者とも理性の發達せることに於て世界の双壁である。但し希臘人の理性は思辨的であつて、數學、論理がその中心であり、支那人の理性は實踐的であつて道德政治がその中心である。従つて支那人の天に對する

信仰は哲學的性質のものであつて、日本人の神に對する宗教的信念はその性質を異にする。

支那人は天を以て思索の對象となし、詩經の宗教的であつた天の觀念が、孔孟の時代に於ては汎神教の傾向を帯び來たり、半ば哲學的にして半ば宗教的であつた。然るに後世・宋・明の時代に至つては、これが純粹なる哲學に變化するに至つた。これに反して日本人の神に對する信仰は常に宗教的である。

(二) 支那人の合理主義は、公正の觀念を發達せしめ、適材を適所に置く云ふ原則を勵行せしめ、遂に「最良者の政治」云ふものを生み出した。即ち最も有徳なるものが選ばれて天子となる云ふ觀念である。堯舜の政治は即ちこれである。従つて不徳なる天子はその位を失はねばならぬ。これがその弱点であつて、國家中心の動搖を免れぬ。これに反して日本人の信念は宗教的であるから、我國の皇室は常に神の延長であり、國民は常に神に仕ふるの態度を以て皇室に仕へる。皇室も亦神の自覺を以て、その尊嚴を保ち、こゝに世界に並びなき「君臣の宗教的結合」云ふ國體を生み出したのである。

(三) 支那の王道主義と稱するは、この哲學的信念から出發したる政治を云ふのである。即ち

天子は上帝の命を受け民を治める官吏であつて、従つて人民を幸福にするこゝがその義務である。もしその義務を怠つた場合に於ては、天子は直ちにその位を失ふ。孟子の所謂「三代の天下を得るは仁を以てす。その天下を失ふは不仁を以てす。」とは即ちその意味である。即ち支那の王道主義なるものは、要するに人民を幸福にするに云ふことであつて、その人民を幸福にする條件だけが君主存在の理由なのである。従つて天子の位とその仁政とは一種の交換條件であつて、支那人が「大徳は必ずその位を得、必ずその録を得、必ずその名を得、必ずその壽を得」と云ふのは要するに天下を幸福にしたる君主の報酬を説くのである。君主から言つても人民から言つても、その間報酬關係、功利的關係が存在してゐるのである。書經に「我を撫すれば則ち后、我を虐すれば則ち讐」と云つたのも、かうした功利主義を言ひ現したものであり、同じく書經に「皇天親なし、諸徳是輔く、民心常なし、諸恵是懷く」と言つたのも同一の意味であつて、天は徳あるものを助け、民は恵あるものに懷くと言ふこと。そこに支那人の功利主義があり、その皇朝が政を失ふ毎に、革命によつて位を失ふ所以である。斯の如き功利的政治觀は、日本の君臣關係とは全く反對なるところで、要するに王道は功利的であるに反し、皇道

は純粹なる君臣の宗教的結合であつて、利害の觀念を超越したる世界唯一の崇高なる政治道德
と言はねばならぬ。

かうした王道と皇道との差別から、歐羅巴の十七八世紀の專制政治の弊を救ふ爲めに、支那
の王道觀念が役立つたのは當然なことであるといへる。歐羅巴人の如き利己主義なる民族に對
しては、支那人の功利主義から出た王道の思想こそ最も適當なる藥劑である。歐洲の利己主義
なる專制君主を警むるに「四海困窮せば天祿永く終らん。」とか「桀紂天下を失ふはその民を失
へばなり。其民を失ふはその心を失へばなり」とか言つた様な功利的道德が極めて有効なのであ
る。

日本の皇道に至つては、君民の宗教的結合であつて、君主を神と信するのでなければ、到底
實行の出来ないものである。歐羅巴人の如き君臣の關係が利己主義なるものにまつては、日本
の皇道は決して模倣の出来ないものである。（『日本精神講座』五來欣造）

八、スメラギズム

是亦革新的日本主義の一派と見てよい、此の主義は元の希望社員たりし吉田靈明が提唱してゐる主義で「スメラギズム」と題する機關紙を發行してゐる。

そしてこの語源については我國天皇を「スメラミコト」と讃稱するに出で皇道を海外に恢弘、皇威を世界に發揚せんことを主義として實踐すべく名稱付けたもので、従つて其の本質は皇道主義と同一と見てよい。

九、國粹主義

國粹主義は日本主義と同じく相當古くから唱へられ、本來西洋崇拜思想を排撃し、我國家の傳統を維持せんとするものであつたが、是亦近來國家革新運動の勃興に刺戟せられて、著しく其の性質に變化を來した。

即ち從來は現狀維持的立場にあつて、マルキシズム運動に對しても必然的に既成政黨乃至資本主義を擁護することをして其の使命であるかの様に觀念付けられて來たが、近來所謂非常時の聲の下に既成政黨が非難せられ、資本主義制度其のものも批判され、検討され、そして其の弊害著しきものにして、之れが制度の打倒さへ叫ばるゝに至つた爲、國粹主義も之れに合流し、資本主義改革をも其の主張の對象とするに至つたのである。

云ひかへれば、從來の如き現制度肯定の下に、赤化防止等を主張した現狀維持的舊設を脱して新しく國家社會主義的色彩を加味したもの云へる。

一〇、農本(自治)主義

農本主義は、資本主義の都市中心、中央集權的政治經濟制度に反對し、無政府主義のそれに似て、農村本位の自治組織、即ち一種の自由聯合主義を主張する。然し無政府主義の一派でも

なく、彼等は天皇制に對し、多かれ少かれ、忠誠を護持を明言する、そこで農本主義は國家主義、無政府主義の不自然な結合體である云へる。

我國に於ける此の派の代表的團體は、長野朗一派の「自治農民協會」、岡本利吉一派の「先驅者同盟」、權藤成卿の「自治學會」橘孝三郎の「愛鄉會」「愛鄉塾」、津田光造一派の「日本村治派同盟」及宮越信一郎一派の「國民解放社」等である。(緋田工著、特高必携)

即ち農本主義は、現代社會組織を都會中心の政治及經濟制度で、農村を疲弊せしめ、自治を破壊するものとして排撃するのである。

二、ファツシズム

ファツシズムは元來一個の主義として提唱せられたものではなく、イタリー首相ムツソリニが採用し、實踐し來つた跡を辿つて、後人がかうもあろうか、あゝもあろうかを探つた結果、

三來上つた思潮である爲に、一言に要約して定義付けることは極めて困難であるが、其の特徴を列挙すれば次の通りである。

一、愛國的立場に立つこと。

二、社會主義（勿論共產主義を含む）を排撃すること。

三、現存せるが如き議會制度を排撃すること。

四、獨裁政治主義を採ること。

近來獨逸の「國民社會主義獨逸労働者黨」（略稱ナチス）が非常な勢で擡頭したが、此の黨の主張が大體に於て、上記の特徴を有し、ムツソリニの主張と相通ふので、世人から此の派もファシズムを奉ずる黨派であるに俗稱せられてゐる。（緋田工著・特高必携）

即ちファシズムは、豫め詳細正確に研究せられ、體系付けられた思想でなく實行の必要から生れ出たのであつて、最初から理論的では無く實際的のものである。

我國に於てファシズム的右翼運動が顯著になつたのは昭和六年秋頃からで、其の發展のすさまじく、燎原の火の如く、燃え熾るに至つたのは、資本主義より派生せる諸弊害や、政黨政治

議會政治に對する世人の信用が往時の様でなくなつたのこ、極左運動の跳梁に依る社會不安醸生の如き、世界的原因が伏在し、更に滿洲事件等に刺戟せられた爲である。日本主義、國家（國民）社會主義、農本主義等は、ファッシズム系に屬する思想と云へる。（「特高警察全書」佐々木與四藏）

ファッシズムは議會主義を非難し、英雄獨裁主義を主張する、イタリーのファッシズムは、ムッソリニの、獨逸のナチスは、ヒットラーの獨裁下にある。（而し、ファッショの獨裁は、共產黨方面の暴民蜂起の爲、當時の國家機關と其の運用だけでは之が鎮壓が出来ない爲、中産階級が實力を以て起つたのである）。議會主義を目して、凡俗平均化の政治形態だと云ふ、議會は數の勝つところ、いかに精良なる一偉人の主張も多數者の反對の前には、一顧の値だも認められない、そして多數者の平均的凡俗政治のみが生れる、だから活潑にして生氣ある而して効果的な政治を行ひ得ない、若し國家が一偉人を得て、この獨裁指導によつて一齊に進むならば、國家國民の繁榮のために最大の能力を發揮し得るであらう、と主張してゐる。（思想警察通論）

一二の者の意見（社會主義的偏向を示すものの立場より、ファッシズムに對する批判）「ファッ

シズムの意義は歐洲大戰後資本主義の一般的危機に於て發生した獨占資本主義の國內的、國際的政治動向であつて、資本主義擁護又は修正のために、一面豫防的反革命として、プロレタリア運動の抑止を目的とする点に求められ、そして統治權力を金融資本の接近度の進展に應じて其の體制をさへ、のへ、發展しゆき、國家資本主義確立の方向を採る。(イタリーのファツシヨは生産は民間の企業を爲すを原則とし、其の弊害のみを統制せんとしてゐる。)所の權力集中的の強力政治であるを云へる。(「ファツシズム研究」佐々弘雄)

「ファツシズムは各國資本主義の危機に應化するために、特殊的に要求された自然發生的の運動形態で、その本質は、帝國主義時代に於ける「資本主義防衛」のための反動的役割を果すべく生れたものに外ならない(「ファツシズム研究」河野密)

「我々がファツシヨ、又はファツシズムを云ふときには國民主義の把握に成功し、社會主義の實現に失敗した運動、または思想を指稱するのであつて、主としてイタリーのムツソリニやドイツのヒットラーが實踐し、高調しつゝある運動や、思想の特殊性を抽出綜合して斯く呼んでゐるのである。(「ファツシズム研究」赤松克麿)

右述べた一二の者の意見は前書せる様に、社會主義的立場より、ファツシズムに對する理論的解剖をなしたるものであり、その解釋の當否は別として、今日實際問題として諸種の社會主義團體は集會に於いて、或はピラ、橄等に於いて「ファツシズム反對」なる主張を表示してゐる實情であるから、その反對する思想的論據を知る一半の資料として掲げたものである。

尙ファツシヨはイタリーで發生した思想であることは既に述べた通りであるが、そのイタリーのファツシヨミ、我國のファツシヨ——ファツシヨミ名稱づけることは正しくないのであるが一般にこの名の下に論じてゐるから、或は擬似ファツシヨミ云つてもよい。——ミは發生の動機を異にし、目的を異にし、主義を異にする。

イタリーのファツシヨ運動の實體は、富豪ミ中産階級にあるのに比して、我國のファツシヨ運動は殆んど反對の立場にあるものである。イタリーのファツシヨの政治の主義は、個人的企業を承認して私有財産は尊重するが、我國のは個人的企業ミ、私有財産を或は否定し、或は輕視する。

イタリーのファツシヨの正面の敵は、共產黨にあるが、我國のファツシヨの正面の敵は、資本

家も、起業家も、政黨である。イタリアのファッショは自ら政黨を作り、單一政黨ではあるが政黨主義に立脚してゐるに對して、我が國のファッショは政黨を否認し、官僚專政を目的としてゐる。イタリアのファッショは生産に重きを置くが、我國のそれは分配に重きを置いてゐる。固よりこの差別によつて、イタリアのファッショを是とするものでもなければ、我國のそれを非とするでもない。唯だ、漫然我國の右傾團體をファッショ運動と稱し、それをイタリアのファッショ派と混同することはいけない。

我國の政治家の中には、ムツソリニが國事を一身に負ひ、專決獨斷するのを見て、痛快事とするところから、自然に英雄崇拜の觀念より、その政治をも想像し、卓勵風發の政治振りの治下には、國民が生々活潑であらうと云ふものもあるが、如何なる英雄が出て三面六臂と動かしても、一人の力には限りがある。要は國民全體に自由と活動を與ふるの外、一國の勢力を振起するの途はない。徒らにファッショと騒ぎ立て、肝心のイタリアにファッショが発生したる事情を知らず、目的を知らず、政經を知らず、主義を知らず、唯其の直接行動にのみ痛快味を覺へて、之れに倣はんことは感心せぬ。

ムツソリニは日本にファツシヨの叫びがある云ふことを聞いて、冷然として、ファツシヨはイタリーの輸出品ではないと云つたこのことである。

若し事實であるならば、その眼識時流を抜くものである。（「旋風裡の日本」竹越與三郎）

ファツシヨなる語義は大體「束ね」と云ふことである、ムツソリニの率ゆる黒シャツ隊は常に斧を多くの木で束ねたファツシヨと稱するものを、どこへでも持ち歩いてゐた、そして遂にはその黒シャツ隊そのものをファツシヨと呼ぶ様になり、更に轉じてムツソリニの強力政治そのものを指す様になつたのである。

一二、社會ファツシズム

社會ファツシズムとは、共產主義者が社會民主主義者を指して、惡罵的意味を含めて呼ぶのであつて「マルクス主義の假面を冠れる愛國主義であり、結局資本主義の新しき段階に於ける

新しき獨裁のための御用主義である」云ふ意味である。

共產主義者に云はせるに、社會民主々義も、國家社會主義も、日本主義も皆、資本主義の新しき獨裁の型であつて、資本主義の延長であるに過ぎない、と見るのである。

而して其の中で、社會民主々義は社會主義の假面を冠つてゐるから最も危険な敵である云ひ之れを社會ファツシズムと呼んで、普通のファツシズムと區別してゐる。(緋田工著、特高必携)

一三、大亞細亞主義

白色人種の壓迫に對抗して、全亞細亞民族の結合協同を圖り、我國皇室を以て之れが盟主として進んで世界全民族の同化融合に依る理想的世界國家を實現することを主張する、而して此の主義の本質とする所は、日本主義の自國優越思想と一致するものであるが、特に對外的活動を主張する点が此の主義の特徴である云へる。

尤も此の主義の根源は一に我國建國理想に基くもので、即ち建國理想の對外的には消極的に、

日本帝國の自衛を完うする外尙積極的に

(イ) 日本文化及日本民族性による他民族の文化的、社會的同化融合

(ロ) 日本國體たる天皇中心一家的體制を組織原理とする他民族の國家的同化融合

を圖るべきものとし、日本精神の内容たるべきものである、此の主義を一口に云ふならば、「日本を盟主として、全亞細亞民族の結成を圖らんとする思想」を云へる。

一四、主要右翼團體の主義綱領

(括弧内は創立年月并に中心人物)

一、黑龍會

(明治三十四年一月
内田良平、伊東知也)

(一) 吾人は肇國の宏謨を恢暢して東方文化の大道を闡揚し進んで東西文明の渾和を圖り亞細

亞民族興隆の指導者たることを期す。

- (二) 吾人は法治主義の形式に偏して人民の自由を束縛し時務に常識を缺き公私の能率を障碍し憲政の本旨を没却したる百般の宿弊を一洗し以つて天皇主義の妙諦を發揮せんことを期す。

- (三) 吾人は現行制度を改造し外交を振制して海外の發展を圖り、内政を改革して國民の福利を増進し、社會政策を確立して勞資問題を解決し以つて皇國の基礎を鞏固ならしめんことを期す。

- (四) 吾人は軍人勅諭の精神を奉體して尙武の氣風を振作し、國民皆兵の實をあけ以て國防機關を充實せしめんことを期す。

- (五) 吾人は歐米に模倣せる現代教育の根本的改革を圖り國體に淵源せる國民教育の基礎學を建設し以て大和民族の公德良智を向上發達せしめんことを期す。

二、大正赤心團

(大正七年四月)
森健二

- (一) 皇室を中心とし我國民精神の統一完成に務む。

(五)(四)(三)(二)

國體の尊嚴を危くする凡ての思想に對し其の撲滅を期す。
帝國憲政の穩健なる發達を庶幾す。
黨派に偏せず一意國威の伸張を念ふ。
殖民興業の國家的發達に協力す。

三、皇道義會

(大正七年 月)
(石井三郎)

(六)(五)(四)(三)(二)(一)

皇室中心主義を基礎とし憲政有終の美をなすこと。
國民思想を善導し忠誠至純の氣風を涵養すること。
大和民族の海外發展に努力すること。
行政機能を刷新し地方自治の發達を圖ること。
殖産興業の振興を策し國防を充實せしむること。
尙武右文の士氣を振作し國士を養成すること。

四、縱横俱樂部

(大正八年六月)
(森傳)

(一)(二)(三)(四)(五)

日本國體の原理を闡明し、皇道を世界に布かんことを期す。

世界經濟聯盟を組織し人類共存共榮の實を舉げんことを期す。

人類共存の大義に基き總ての偏狹的思想を撲滅せんことを期す。

社會混沌の病根を剔抉し之が掃蕩を期す。

東西文明の融合を圖り純美文明を創造せんことを期す。

五、大日本國粹會

(大正八年十月
尾野實信、高田豐樹)

(一)(二)(三)(四)(五)

皇室を中心として民族の統一を計り盛んに經綸を行ふ事。

政治を俠道により行ひ政治家に信義を守らしむる事。

韓國併合以來二十年東亞の天地今猶擾亂熾ます生民塗炭に苦しむ、之を救ふは日本國民の天職と信する事。

敬神崇祖の念を昂め國民の思想を善導すること。

勞資の協力により資本家勞働者相互の共存共榮を圖り國民生活の安定を得せしむる事。

六、赤化防止團

(大正十一年十一月
米村嘉一郎、金輪日東)

(一) 赤化は社會秩序の根底を破壊し、人類の幸福を呪咀するものなるが故に本會は一死以つて之が防遏に任すべきを誓ふ。

(二) 資本家の横暴と富豪の専恣とは過激思想助長の原因をなすが故に、資本家、富豪に對して極力猛省を促す。

(三) 勞働運動は爾來社會主義との連絡に依り多く誤解を受けたり、眞に勞働者の叫びたるものに何人か之に反對せん、本會は極力勞働運動の社會主義との分離を期す。

七、滿蒙義團

(大正十二年八月
中野源一郎)

(一) 大日本の興隆彌々盛んならしめ國家を永へに泰山の安きに置かんことを期す。

(二) 滿蒙の沃野を開發し其の寶庫を拓かんことを期す。

(三) 赤化の侵入を防遏し進んで大亞細亞人の糾合を圖り以つて異人種に拮抗せんことを期す。

(四) 世界公道の咽喉たる此地の制度を鞏固にし以つて後日霸を唱ふる基礎を築かんことを期す。

八、大統社 (大正十三年 月)
武井 裕

(一) 大統社は光輝ある我國體宣揚のため決死殉難の志士によりて結ばれたる血盟たり。

(二) 大統社は新興日本の機運に副はざる制度不條理なる舊惡制度の改廢を期す。

(三) 大統社は弱少亞細亞諸民族の大同團結を策し奪はれたる亞細亞の奪還を期す。

(四) 大統社は進んで外壓の武裝的鐵鎖を絶ち人種の平等入國貿易の自由を提唱し世界人類の共存共榮を期す。

(五) 大統社は一切の行動世俗の毀譽褒貶を顧みず只天の照鑑審判を俟つ。

九、大日本正義團 (大正十四年 二月)
西井 榮藏

(一) 忠君愛國孝行信義の念を専し、己が稼業に精勵すべし。

(二) 仁道正義を旨とし、慈悲仁俠の道を忘るるな。

(三) 自重の念を起し廉耻の心を養ひ共同親和の實をあげよ。

(四) 親分は親の如く乾分は子の如く乾分同志は一家兄弟たり、親分の命する處は水火も辭せ

兄弟は互ひに相親しみ互ひに相扶け又禮讓を忘る可からず。

一〇、神農會

(大正十五年十一月)
(山田春吉)

(一) 皇室中心國民相愛の大義に起ちて諸制を釐革し陋習を打破し以つて社會平和と國家興隆に資せんことを期す。

質實剛健なる精神の振興を計るこゝ。

(二) 社會缺陷の改善不當なる制度の改革促進を計るこゝ。

(三) 博愛共有の大義を宣揚するこゝ。

(四) 公衆慰安の大道を展開するこゝ。

(五)(四)(三)(二)

一一、明德會

(昭和二年三月)
(鹽谷慶一郎)

吾人は忠誠皇室を尊ぶ。

吾人は我が王道の大仁に依つて全世界の統制を期す。

(三)(二)(一) 吾人はボルシェヴィズム並にファシズムを排す。

(五)(四)

吾人は社會各階級各個人の正義と自由を主張す。
吾人は貴族富豪の專恣横暴を許さず。

二二、七生義團

(昭和三年八月
小島安次郎、木村 清)

我等は帝國憲法を尊重してこれを擁護す。

我等は國家社會の秩序破壊者及び煽動者に對して挑戰す。

我等は公德の尊重維持者を以て自任す。

我等は頑迷を排撃し進歩主義を重す。

(一)(二)(三)(四)

三、愛國社

(昭和三年八月
岩田愛之助)

(一) 愛國社は對支問題及び思想問題の研究を爲す。尙問題の發生する毎に社員たるものは會議に依り種々なる運動を爲すものなり。

(二) 本會は大陸積極政策の遂行及び研究並に思想問題の研究を以て目的とする。

一四、國本社（大正十五年三月
平沼騏一郎男）

- (一) 本社創始の大使命は我日本帝國の興隆と我が民族の安榮を圖るを以て目的とす。
(二) 右使命を果す爲め國民精神の作興と智徳の竝進を主張す。
(三) 現下の時弊を匡救せん爲實質剛健醇厚中正、獨立創始、博愛共存、の美風を涵養せんことを期す。

一五、日本會（昭和二年九月
野一色）

- (一) 日本文化美性の發揮東西文化の融合。
(二) 非日本主義的思想及行動の排撃。
(三) 全國的風紀革正の運動。
(四) 勤勞精神の鼓吹獎勵。
(五) 自主的對外正義の高唱。

一六、恢引會（大正十三年三月
大井成元）

- (一) 明治天皇の御遺徳を顯揚し、今上陛下の聖旨を奉體して國民精神を作興し時弊を矯正し以つて國體の精華を發揮せんことを期す。
- (二) 教育國防に關する事項を討究し以つて國運の發展に資せんことを期す。

一七、明倫會

(昭和七年七月
田中國重、石原廣一郎)

- (一) 皇祖肇國の神勅を奉戴して天壤無窮の我國體を尊重し忠君愛國及献身奉公の至誠と道德的觀念との普及徹底を期す。
- (二) 既成政黨の積弊を打破して天皇政治の確立國家本位の政始の遂行を期す。
- (三) 退嬰追從外交を排して自主と正義とを基調とする外交を斷行し以て國威國權の宣揚發展を圖り且つ大亞細亞主義の實現を期す。
- (四) 統帥大權の發動並國際的軍備平等權を確保し以て自主的國防の安固を期す。
- (五) 根本的行政財政及税制の整理を斷行し且産業の振興、中正なる經濟政策の遂行並民族の海外發展に依つて國力の充實及國民生活の安定を期す。

一八、猶存社

(大正八年創立、全十二年行地社其他ニ解消)
大川周明、北一輝、滿川龜太郎

革命的大帝國の建設運動。

國民精神の創造的革命。

道義的對外策の提唱。

亞細亞解放の爲めの大軍國的組織。

各國改造狀態の報道批評研究。

國柱的同志の魂の鍛練。

(一)(二)(三)(四)(五)(六)

一九、行地社

(大正十三年創立、昭和七年二月神武會ニ解消)
大川周明、滿川龜太郎、中谷武世

維新日本の建設。

國民的理想の確立。

精神生活に於ける自由の實現。

政治生活に於ける平等の實現。

(一)(二)(三)(四)

- (五) 經濟生活に於ける友愛の實現。
(六) 有色人種の解放。
(七) 世界の道義的統一。

二〇、神武會 (昭和七年二月
大川周明)

- (一) 日本建國の精神、日本國家の本質及國民的理想を闡明し、本末主客を顛倒せる形式的教育の弊風を改革し、眞個の日本國民を育成すべき皇國的教育組織の實現を期す。
(二) 天皇親政の本義に則り、黨利を主として國策を從とする政黨政治の陋習を打破し、億兆心を一にして天業を四海に恢弘すべき皇國的政治組織の實現を期す。
(三) 一君萬民の國風に基き私利を主として民福を從とする資本主義經濟の搾取を排除し、國民の生活を安定せしむべき皇國的經濟組織の實現を期す。

二一、建國會 (大正十五年二月
赤尾敏、津久井龍雄)

- (一) 我等は普通選舉の實施と共に全國民をあけて天皇に直接し建國の精神に立脚せる眞正な

る日本民族の日本國家を建設せんことを期す。

(二) 我等は日本民族が有色人種の先頭に立ちて全人類の世界文明を實現するの我が歴史的使命を成就せんことを期す。

(三) 我等は日本民族の傳統的道德を維持し輕佻浮薄を排し質實剛健の美風を作興せんことを期す。

(四) 我等は國家によりて國民生活を統制し日本國民の天皇の赤子として平等なる所以を徹底し同胞中一人の不幸不平なるものなからしめんことを期す。

(五) 我等は各人の有する財産、地位、階級、職業、知識、技能、筋肉が皆國家社會のために存在するこゝを確信し、犠牲の精神に依りて極度に之れを國家社會に奉ぜしめんことを期す。

二二、大日本生産黨

(昭和六年六月
内田良平、吉田益三)

大日本主義を以て國家の經綸を行ふ。

(一)(二) 欽定憲法に違ひ君民一致の善政を徹底せしめんことを期す。

(四)(三)

國體と國家の進運に適合せざる法律制度の改廢を行ひ政治機關を簡易化せしむること。
自給自足立國經濟の基礎を確立すること。

二三、日本國家社會黨

(昭和七年五月
赤松克麿、平野力三)

(一)

我黨は國民運動により金權支配を廢絶し、皇道政治の徹底を期す。

(二)

我黨は合法的手段に依り資本主義機構を打破し、國家統制經濟の實現に依り國民生活の保障を期す。

(三)

我黨は人種平等、資源衡平の原則に基きアジア民族の解放を期す。

二四、國粹大衆黨

(昭和六年三月
笹川良一、島山義雄)

(三)(二)(一)

神武肇國の活精神に培はれたる我國特有の文化を擁護發展せしめ以て國利民福を期す。
産業上の自由競争の弊害を芟除し相互扶助の精神の長養具現を期す。

立法、行政及地方自治に侵徹せる弊害陋習を打破し神州正氣の伸張を期す。

昭和八年十二月二十二日印刷
昭和八年十二月二十三日發行

奈良縣警察部

印刷者 奈良市橋本町三十六番地 善兵衛

印刷所 奈良市橋本町三十六番地 奈良明新社

電話 一五〇四